西洋の詩
東洋の詩

平川祐弘

西洋の詩　東洋の詩

平川祐弘

河出書房新社

西洋の詩　東洋の詩
© 1986, printed in Japan
一九八六年五月一日　初版印刷
一九八六年五月十日　初版発行
著　者　平川祐弘
発行者　清水　勝
発行所　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話（〇三）四〇四―一二〇一〔営業〕
四〇四―八六一一〔編集〕
振替（東京）〇―一〇八〇二
印　刷　暁印刷
製　本　小高製本
装　幀　渋川育由
定価はカバーおよび帯に表示してあります。
ISBN 4-309-00429-6

平川祐弘（ひらかわ・すけひろ）

〔著書〕

『ルネサンスの詩』（沖積舎、昭和五七年）
『和魂洋才の系譜』（河出書房新社、昭和四六年）
『西欧の衝撃と日本』（講談社、昭和四九年）
『謡曲の詩と西洋の詩』（朝日新聞社、昭和五〇年）
『夏目漱石』（新潮社、昭和五一年）
『小泉八雲』（新潮社、昭和五六年）
『東の橘　西のオレンジ』（文藝春秋社、昭和五六年）
『中世の四季――ダンテとその周辺』（河出書房新社、昭和五六年）
『平和の海と戦いの海』（新潮社、昭和五八年）
『漱石の師マードック先生』（講談社、昭和五九年）
『進歩がまだ希望であった頃』（新潮社、昭和五九年）

〔翻訳〕

ダンテ『神曲』（河出書房新社、昭和四一年）

西洋の詩　東洋の詩

目　次

まえがき 7

I

高村光太郎における訳詩と創作詩 11

パリ時代の李太郎の詩『怨言』 47

ボーケールの月の影 72

オーストリアの泉のほとり 82

失われた青春 86

監獄の詩三篇 94

蕪村、エリュアール、プレヴェール 116

谷川俊太郎の『生きる』とエリュアールの『自由』 147

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

Ⅱ

ウェーリー英訳『詩経』の一詩について　161
西洋近代詩中の白楽天　177
日本古代詩歌の魅力　191
『古事記』の黒姫の物語　201
ハーンの『お前百まで』の英語訳　216
漱石の俳句と外国文学　221
国籍を異にする人々の俳句やハイク　244

Ⅲ

詩論とナショナリズム　251
あとがき　281

西洋の詩　東洋の詩

まえがき

『西洋の詩　東洋の詩』と題したが両者を別個に論じたわけではない。第Ⅰ部は日本人が西洋の詩をどのようにして換骨奪胎して我物としたか、その三四の例を高村光太郎や木下杢太郎の場合などに即して説明したのである。西洋の詩がいかにして東洋の詩と化したか、というのが小論の眼目である。

第Ⅱ部は西洋の人が東洋の詩をどのように解釈してその詩美を示したか、その二三の例をウェーリーの場合などに即して説明したのである。東洋の詩が西洋の詩となった様ばかりか、『詩経』の原詩が、吉川幸次郎教授などの伝統的解釈と違う、別個の新鮮な光を発する様が見えるだろう。また日本人でも西洋文学者である漱石などの感受性を通して、日本詩歌の魅力をとらえなおしてみた。

私たちは外国文化を理解するために外国語を習う。しかし外国語を習ってその詩情を解するにいたる人はすくない。それは無理からぬことで、母国語の詩情を解さぬ人が外国語の詩情を解する道理はないからである。ところが過去においては漢字文化圏にもラテン文化圏にも、母国語の詩や歌

には顔をそむけながら、中心の大文化の言葉で書かれた詩文には格別の魅力を覚える人々が存在した時期というものがあった。東洋では知識階級はみな漢詩文を書き、西洋ではみなラテン語詩文を書いていた時期である。それがその土地土地の言葉で詩は書くべきだ、という詩論に押されて人々はやがてみな母国語で詩を書くようになる。そのような東西両洋に共通する母国語優位の詩論の出現とナショナリズムに触れたのが第Ⅲ部である。以上、いずれも詩と詩の出会いの不思議を、その文化史的空間の中でとらえようとしたのが、この小著の狙いである。

ほかに折々に訳した詩やものした随筆なども拾って一巻の書物を編んだ。外国の詩を解することは外国文化の心にはいりこむことである。外国の詩的感動を我物として感じる人は外国文化の真髄に触れる人である。詩が相接するところは文化が互いに相交わるところである。西洋の詩と東洋の詩の相会うところは東西の文化が互いに相結ぶところである。本書はその種の詩の交錯や詩の交配 entrecroisement の問題に探りを入れたものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

I

高村光太郎における訳詩と創作詩

一　『智恵子抄』の詩と真実

高村光太郎の芸術活動について、彫刻や作詩だけでなく、その翻訳にまで言及する人は、光太郎の仕事を注意ぶかくたどった読者といえるにちがいないが、その熱心な読者の間に光太郎のヴェルハーレンの訳詩の仕事を高く推す人が少なくない。[1] それもただたんに訳詩としての出来映えを推賞するだけでなく、ヴェルハーレンがその妻マルトへの愛をうたった『明るい時』、『午後の時』などの詩集が、高村光太郎がその妻智恵子への愛をうたった『智恵子抄』となんらかのつながりがあるであろうことを漠然と予覚して、光太郎によるヴェルハーレンの訳詩の意味の重要さを口にしてい

るのではないかと思う。例えば吉本隆明氏は両者のつながりについて次のように言及している。(2)

高村には、『ゼルハァラン』という優れた評論があるが、おどろくべきことには、高村が論じているエミイル・ゼルハァランはその閲歴において高村と著しく同化してしまっている。ゼルハァランがマルト・マッサンとの恋愛によってデカダンスから脱け出すという件りになって、高村かゼルハァランかわからなくなってゆく。評論がついに論者の思想を模倣することは通例のことかもしれないが、閲歴を模倣することは不可能だとすれば、高村がゼルハァランに出会ったのは稀有のことであったというほかはないのである。このような経路によってか、『智恵子抄』は、ゼルハァランの恋愛詩から、たくさんの影響をうけざるをえなかった。いや、この影響は、単に手法的な影響にとどまるかどうかは疑わしく、むしろゼルハァランとマルト・マッサンに模して、『智恵子抄』のなかの高村と智恵子との生活を仮設したとさえいえるかもしれなかった。

吉本氏はついで『智恵子抄』とヴェルハーレンの『明るい時』をそれぞれ四連ずつ掲げて比較例とし、さらに次のように論を進めた。

ゼルハァランの〔『明るい時』だけでなく〕『午後の時』、『夕べの時』も、また『智恵子抄』にいくらかの影響をあたえているが、これらの対比からみてしられるように、すでにゼルハァランの発想自体が、いちじるしく『智恵子抄』のなかに、とりいれられていることは明瞭である。も

し、高村にヱルハァランの感情的な模倣があるとすれば、例えば、「僕等は高く　どこまでも高く僕等を押し上げてゆかないではゐられない　伸びないでは　大きくなりきらないでは　深くなり通さないでは——何といふ光だ　何といふ喜だ」(『僕等』)というような『智恵子抄』の生活感情は疑われざるをえないのである。高村が、何という光だ、何という喜びだ、というとき、生活意識をおおよそもたない分裂性気質の智恵子夫人が、おし黙っている上を、こういう詩句は通りすぎてしまったのではなかろうか。勿論、高村は、充分それを知りつくしたうえで、いわば独特の「自然」思想に則して『智恵子抄』にあらわれた生活史を仮設したのではあるまいか。

吉本氏はこのように『智恵子抄』の詩と真実の落差というかその乖離について推測をめぐらした。この吉本氏の冷い、しかし鋭い洞察については、今後、高村光太郎と智恵子の実生活の真実が公表されてゆくにつれ、——たとえば雑誌『ちくま』一九七二年四月号の難波田竜起氏の『高村光太郎と智恵子の思い出』など『智恵子抄』とはニュアンスを異にする智恵子を伝えていて見事だが——その推測の当否が判明してゆくにちがいない。『智恵子抄』のどの部分が詩 Dichtung であり、どの部分が真実 Wahrheit であるか、という分析は、『智恵子抄』が、芸術作品としての詩としてというよりも、光太郎と智恵子の愛の伝記として読まれている、という事実が世間に存する限り、やはり必要な分析であろうと思われる。

吉本氏はいま引いたように、ヴェルハーレンとマルト夫人の愛の詩を座標軸にすえて、その感情的な模倣として詩集『智恵子抄』が生まれたのではないか、という推理を試みた。しかし吉本氏の

そのような冷徹な推測とはちょうど対をなすように、高村光太郎と智恵子夫人の愛の生活を座標軸にすえて、その感情的な一余響として訳詩集『明るい時』、『午後の時』が生まれたのではないか、という逆方向の推測もまたできないわけではない。現に昭和十六年、青磁社から『仏蘭西詩集』が出た時、編纂者村上菊一郎氏は次のような言葉を後記に寄せていた。

高村光太郎氏は、久しく筐底に秘め置かれた未発表の『午後の時』の全訳草稿を快く貸与された上、選択を編纂者に一任された。『明るい時』『天上の炎』の訳詩集の場合と同様に、今は亡き令夫人への愛が、氏のヴェルハーラン訳詩の上に息づいてゐると書いては礼を失するだらうか。

吉本氏がヴェルハーレンとマルト夫人の愛という座標軸を設定してそこに推測の基礎を置いたのとちょうどうらはらに、村上氏は高村光太郎と智恵子夫人の愛という座標軸を絶対化してそれを尺度に光太郎訳ヴェルハーレン詩集の真実を示唆しようとした。両氏の見解はそれぞれに興味ふかいが、しかし筆者は右に引いたような特定の座標軸のいずれかを選んでそれを固定化し、その座標軸に依拠して他を説明するという行き方を取らない。その理由は、高村光太郎においては訳詩が創作詩に影響を与えるとともに、創作詩が訳詩にも影響を与えるという相互作用が長年にわたって続いているからである。いまその間の事情をやや詳しく説明しよう。

ヴェルハーレンとマルト夫人に模して『智恵子抄』の中の高村光太郎と智恵子との生活を仮設したとする吉本氏の説は間違いなく一面の真理を突いたものだと思う。しかしヴェルハーレンとマル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.